

家がガラガラと崩れ

「71年前の8月6日に広島にいた」という理由で、私は被爆者として71年生きてきました。

あの日、3人の兄たちは登校前のひとときを庭で遊んでおり、3歳の私は、叔母たちを女学校に送り出したあと蚊帳の中に横たわっていた身重の母のそばで寝ころんでいました。兄たちが「B29の音が聞こえる！」とバタバタとかけこんできた途端、目もくらむような閃光が走り、黒い煙突のシルエットが浮かび上がったと思ったとき、家がガラガラと崩れてきて生き埋めになりました。

母が叫びながら、私たちをがれきの中から引っ張り上げてくれました。

いま伝えたい

被爆者から

〈27〉放射能被害の恐ろしさを伝え続けて

兵庫県芦屋市原爆被害者の会会長

千葉孝子さん(74)



日本被団協主催の近畿ブロック相談事業講習会で

奇跡的に大きなけがもなく、2階が屋根代わりのあばら家で3カ月余過ごしたのち、11月に広島を離れました。京都から兵庫県へと転居した私たちは、病気がちな生活を送っていました。当時占領下にあった日本は、GHQの指令により、広島・長崎の人は当時のことについて語ることも禁じられていて、原爆については何ひとつ知らされていませんでした。今から考えると、被爆によって免疫力が低下していたせいですが、そんなことは知らない母は「前はもっと元気だったのに」と悩んだそうです。

しかし、彼は「ともに重荷を負おう」と言ってくれ、結婚しました。案

恥じました。

の定、鼻血が出たり、貧血で倒れたり、何よりも

「ヒバクシャ」は、どんな増え続けています。

ました。あとから結婚した妹が赤ちゃんを連れて

「ヒバク」の影響が世代を超えて現われ続けるということ。核兵器も原発も廃

里帰りしたとき、「外孫でもこんなにかわいいの

絶するしかないのです。

に、内孫やったらもっと

先月、国連の委員会で核兵器禁止条約の交渉開始

やしている「姑」を見て、

を求めた決議案が採択されたにもかかわらず、唯

何度物陰で泣いたことか。

一の被爆国である日本政府がこれに反対したこと

に、結婚10年目に初めて

に大きな怒りを感じます。国連で本格的な議論

第一子が誕生し、続けて

が始まる来年3月へ向け、さらに「ヒバクシャ

第二子、さらに第三子に

国際署名」を広げるため

恵まれました。でも、子

に、がんばります。

どもたちが体調を崩すた

びに「被爆のせい？」と

私がお春期を迎えたこ

ろ、「被爆者は子どもが

できにくい」とか「二世

は白血病になりやすい」

などと言われ、「私は結

婚してはいけません。子

どもを産んではいけない

ました。そんな私の前に

と自分に言い聞かせてい

ました。そんな私の前に

と自分に言い聞かせてい

ました。そんな私の前に

と自分に言い聞かせてい

ました。そんな私の前に

と自分に言い聞かせてい

ました。そんな私の前に